

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870023

研究課題名(和文)国語学力調査を活用した学習指導改善に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Study about the educational guidance improvement for which Japanese survey on academic performance was utilized

研究代表者

本橋 幸康(MOTOHASHI, Yukiyasu)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：80386549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：国語学力調査を活用した学習指導改善に関する基礎的研究として、戦後の国語科学力調査(文部省・国立教育研究所や都道府県地域学力調査)と地域基準(基底)教育課程を対象として、国語の学力観の形成・構造、学習指導観の考察を行った。昭和20年代において国語の能力と能力とを関連づけた有機的な学力観の形成を見いだすと共に、実生活に即した題材を扱ったり、「話し合い」や「調べ学習」など児童主体の言語活動が設定されていたことを指摘することができた。

研究成果の概要(英文)：Study about the educational guidance improvement for which Japanese survey on academic performance was utilized. I considered about the study of Japanese language ability. Independent learning was established through a discussion and check learning. The ability and the ability were considered about the related learning ability.

研究分野：国語科教育

キーワード：学力調査 教育課程

1. 研究開始当初の背景

日本における過去の全国各地の国語の学力調査の分析・活用の優れた取組を史的・網羅的に取り上げた研究は十分になされていないのが現状である。

昭和20年代は学力低下の実態把握を目的とした学力調査が多く実施されていた。昭和20年代における学力調査は、読み書き計算などのいわゆる基礎学力観が重視されていた。

戦後新教育で討論・話し合いなどの学習指導で重視された問題解決や判断力など問題解決に関する学習指導と評価が乖離していた状態であったと指摘できる。

国立教育研究所や国立国語研究所などが実施した大規模な学力調査の学力構造については分析がなされているものの、全国各地で行われた授業改善・カリキュラム改善のための学力調査の取組を取り上げ、学力調査の具体的な分析方法や活用方法まで視野に入れた研究や、昭和20年代後半から全国各地で作成された地域の基準・基底カリキュラムの評価として行われた学力調査の役割を取り上げた史的研究は、皆無である。

研究代表者は、これまでに2001・2002年度科研費基盤研究(C)(2)(13680333)『戦後、昭和20年代における総合主義教育の研究—国語教育の視点から—』(研究代表者:田近洵一(早稲田大学・東京学芸大学名誉教授)、研究協力者として参加。)、2006・2007年度科研費基盤研究(C)(2)(18530732)『全教科の学習に生きる国語学力の育成と定着に関する基礎的研究』(研究代表者:浜本純逸(前早稲田大学教授・神戸大学名誉教授)、研究協力者として参加。)、2008・2009年度科研費若手研究(B)(20730561)研究代表者『国語の学力調査を活用した授業・カリキュラム改善の取組に関する基礎的研究』等において、カリキュラム資料から「話し合い」を重視した学習指導の特色や、国立教育研究所や文部省の学力調査の結果をもとに授業改善に取り組んだり、学力調査を補う形で全国の地域教育研究所や教育委員会が追跡調査や学力を焦点化した調査を行い、学習過程に注目して授業改善に取り組んでいた実態を明らかにしていた。

2. 研究の目的

本研究では、昭和20年代から主に昭和30年代以降の地域教育研究所が作成した地域基準(基底)教育課程、学力調査、学力調査を活用した授業改善の資料を主な対象として、そこに見られる学力観、学習指導観の特質を明らかにすることを目的とした。

国語の学力調査の問題構造・分析方法・活用方法から学力観の史の変遷を明らかにすること。

授業改善のために学力調査を活用する有益な学習指導の在り方を明らかにす

ること。

国語の学力調査をめぐる学力構造を解明することは、多様な国語学力観の形成過程を明らかにし、国語科評価史研究を実践的研究の立場から考究していくことでもある。

3. 研究の方法

教育課程および学力調査に関する資料の収集・整理・分析を行った。特に、学力調査に関して、資料の収集・整理・調査研究については、各都道府県の教育委員会および各学校が独自で実施した学力調査に絞った。また、本研究では、主に北海道・東北地方・関東地方の資料収集を行った。

以下、主な資料調査に赴いた図書館等である。

- ・ 北海道立教育研究所図書資料室・北海道立図書館・北海道立釧路教育センター・北海道立文学館・北海道函館市立図書館・札幌市教育総合センター教育図書資料室・青森県立図書館・秋田県立図書館・岩手県立図書館・盛岡市立図書館・宮城県立図書館・福島県立図書館・山形県立図書館・栃木県立図書館・群馬県立図書館・茨城県立図書館・埼玉県立総合教育センター教育図書資料室・埼玉県立図書館・北海道教育大学札幌校・釧路校・函館校附属図書館・東北大学附属図書館・早稲田大学附属中央図書館・埼玉大学附属図書館 等

上記各道・県立図書館等では主に昭和30～40年代における全国学力調査の県版報告書、すなわち、文部省、国立国語研究所および国立教育研究所が実施した学力調査に対する各都道府県教育委員会の解説資料と、各道県の教育委員会および各学校が独自で実施した学力調査とその分析・活用資料を収集することができた。

4. 研究成果

地域学力調査の資料からは、有機的な学力観の形成を指摘することができた。ここではその一部を紹介する。

学力構造・学力観の考察

本橋幸康(研究代表者)「昭和二十～三十年代における地域学力調査にみる学力観と評価観—千葉県小学校低学年学力調査を中心に—」においては、昭和20年代の地域学力調査の取り組みの中に国語の能力と能力とを有機的に結びつけて構造化する学力観を見出すことができた。教育課程編纂にあたり作成された能力表の能力を個別の能力ととらえるのではなく、それらは「有機的に一体となって働いている」とする総合的な学

力観が形成されていた。国語の「能力(～する力)」と、「活動(～することができる)」とは一体ではないこと、国語科で育てるべき「能力」とは何か、を改めて問う試みであったと位置づけられる。

また、本橋幸康(研究代表者)「地域学力調査における国語学力観の形成 昭和30年代を中心に」においては、昭和30年代における全国学力調査の報告書および地域学力調査報告書を取り上げ、「文を吟味して読んでいない。段落相互の関係をよくつかんでいない。指示語の文中における関係がわからない。状態を示している指示語の読みとりがじゅうぶんでない。(埼玉県教育委員会『全国小・中学校学力調査報告書』第43号(昭和39年3月))」といった精読及び文章全体とを関係付けて読むことが全国的な課題であったことを指摘した。

また、京都府の学力調査報告書を紹介し、各問いの中から「主題把握」と「描写を読み取る力」を問う問題の正答率のクロス集計を行い、国語の能力と能力の相関関係を考察する試みなど、国語学力の有機的関連を示す国語学力観を指摘した。

「話し合い」「調べ学習」などの主体的な学習の設定と領域の有機的関連

教育課程については、主に北海道(札幌市・旭川市・釧路市・函館市)の基準(基底)教育課程を収集・比較することができた。特に「話し合い」や「調べ学習」を軸とした課題解決学習が設定されていること、教科書と他の資料とを読み比べる活動が設定されていること、日常生活に関連する題材が用いられていることなど、実生活に立脚した主体的な学習の展開となるような工夫を見出すことができた。

同時に、学力調査同様、昭和二十年代における埼玉県基準教育課程において、「はなす」「きく」「よむ」「かく」の有機的関連をカリキュラムの中にも見出すことができた。例えば、「話し合い」の活動をとりあげると、次の～に分類することができる。

- 題材そのものについて内容の確認、情報の共有をする話し合い
- 方法知(～の仕方)について話し合う
- 目的に応じた言語活動について話し合う
- 学習経験について話し合う
- 経験に関連付けて話し合う
- 学習計画について話し合う
- 自分達の学習活動について話し合う(課題・振り返り・評価)

以上のようにただ活動させたり、「意見を交流する」というような漠然とした「話し合い」が設定されているのではなく、課題を見つけ、解決のための方法知を検討し、解決のための話し合いを行う主体的な学習活

動として「よむ」「かく」「つくる」「はなす」「きく」が有機的に関連づけられて「話し合い」が設定されている。課題の解決に向けて自分達の学習経験や経験に関連付けたり、学習計画を立て、さらには自己評価、相互評価を行うような機能的な「話し合い」が設定されている。いきなり意見の交流をするという話し合いではなく、共通点や相違点をみつけたり、自分の経験に照らし合わせたり、～のような児童同士の「話し合い」を通して、児童は自分自身の意見を形成し、学習を深めていくことが期待されている。

「実生活に立脚した学力」の育成

昭和20年代における地域教育課程においては、教科書教材に関連して「調べ学習」などを行う中で身近な生活の中での読書や資料などを読み比べたり、関連づけて読む活動が多く設定されていた。平成十九年度から実施された「全国学力・学習状況調査」においては、「知識」と「活用」の二つの問題構成からなり、「実生活に立脚した」学力が問われている。「主として『知識』」に関する問題では、「身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能など」「描写、要約、紹介、説明、記録、報告、対話、討論などの基礎的な言語活動に関すること」などが問われている。「主として『活用』」に関する問題は、「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容など」「日常生活や社会生活で必要とされる読書・鑑賞・創作などの言語活動の活用に関すること」など、「知識」同様、実生活における言語活動に関する内容が問われている。また、「実生活に立脚した学力」として、教科等の学習に加え家庭生活や地域での生活を含めた「読書生活」や「表現生活」と定義している。

調査問題の特質としては、OECDの枠組みも参考にしつつ作成されている点が挙げられる。児童・生徒の学習の一場面、実生活における一場面がリード文で示され、学習の過程が問われている点に着目したい。

「全国学力・学習状況調査」において問われている学び(言語活動)とその学びの場を分析・考察したところ、実生活の場を大きく【国語の授業での課題への取り組み】と【国語の授業以外での課題への取り組み】とに分類し、さらに【国語の授業以外の授業】【学級】【委員会】【学校生活】【地域・家庭他】に分類することができた。学校生活と、学校生活以外の日常生活をも含む概念であることを確認した。

学力調査資料の目録は作成中である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1 本橋幸康「旭川市中学校教育課程(一九五四)におけることばの教育」『国語論叢』さいたま国語教育学会 第4号(2015)6-13 査読有

2 本橋幸康「地域学力調査にみる国語学力観の形成 昭和30年代を中心に」『国語論叢』さいたま国語教育学会 第3号(2014)1-10 査読有

3 本橋幸康「埼玉県基準教育課程(昭和二十七年)におけることばの教育-言語活動(「はなす」「きく」「よむ」「かく」「作る」)の有機的関連」『国語教育史研究』国語教育史学会 第三十四巻(2014)47-54 査読有

4 本橋幸康「国語学力観の検討」『早稲田大学国語教育研究』早稲田大学国語教育学会 第三十四巻(2014)47-54 査読有

5 本橋幸康「釧路市教育課程中学校編(一九五四)におけることばの教育」『国語論集』北海道教育大学釧路校国語教育研究室 第11巻(2014)1-9 査読無

6 本橋幸康「昭和二十~三十年代における地域学力調査にみる学力観と評価観-千葉県小学校低学年学力調査を中心に」『国語論叢』さいたま国語教育学会 第2号(2013)25-31 査読有

7 本橋幸康「地域学力調査にみる国語学力観の形成-昭和20年代を中心に」『国語論叢』さいたま国語教育学会 第1号(2013)1-9 査読有

〔学会発表〕(計7件)

1 本橋幸康「言語活動の充実を図る国語科学習指導について」埼玉国語教育研究会 埼玉国語教育連盟 2月例会(2015年2月10日)富士見市立鶴瀬西交流センター(埼玉県・富士見市)

2 本橋幸康「昭和30年代における地域学力調査にみる国語学力観」さいたま国語教育学会 第17回例会(2014年8月2日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

3 本橋幸康「地域教育課程における学力観と学習指導観」さいたま国語教育学会 第13回例会(2014年4月19日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

4 本橋幸康「昭和20年代後半における話し合いの特質 埼玉県規準教育課程を中心

に」さいたま国語教育学会 第11回例会(2014年3月22日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

5 本橋幸康「高等学校入学試験問題における学力観の変容」さいたま国語教育学会 第10回例会(2014年2月22日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

6 本橋幸康「言語活動の充実を図る国語科学習指導」埼玉大学国語教育学会 2013年度大会(2013年12月7日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

7 本橋幸康「昭和20~30年代における国語学力観の検討」さいたま国語教育学会 第4回例会(2013年8月13日)埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

本橋 幸康(MOTOHASHI, Yukiyasu) 埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 80386549

研究協力者

研究にあたり次の研究者から助言や研究協力をいただいた。

小原俊氏(OBARA, Shun) 文部科学省・初等中等教育局教科書課・教科書調査官

田近洵一氏(TAJIKA, Junichi) 前早稲田大学・教育学研究科・教授

桑原隆氏(KUWABARA, Takashi) 前早稲田大学・教育学研究科・教授

佐野比呂己氏(SANO, Hiromi) 北海道教育大学釧路校・学校カリキュラム開発専攻・教授

吉光寺勝己氏(KIKKOUJI, Katsuki) 北海道教育庁社会指導主事

悉知由紀夫氏(SHICHI, Yukio) 駒澤大学高等学校